HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会関係における人と機関
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1966
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77293
Type	manuscript
Note	資料作成年不明（システムの制約のため、発行日には没年を入力した）
File Information	X006_01.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

9字×50字詰 19行、行間8字

柱は左の数ページのみ、中扉の書名を入れる

社會関係における人と機関

鈴木榮太郎

9字×10字下り

一　弘前駅での旅客調査

3行とり

5字

我々は村落と村落との間の関係や村落と都市との間の関係及び都市と都市との間の関係、すなわち廣く聚落社會間の社會的交流現象は

関係

具体的には甲の聚落社會の人が機関の座からか機関の座をはなれてか乙の聚落社會の機関の座にある人か機関の座にない人に対する

関係である。それは次の四類の関係に分類する事ができる。

一、人が人に対する関係
二、人が機関に対する関係
三、機関が人に対する関係
四、機関が機関に対する関係

笹森秀雄君の弘前市青年者の青年団的調査（昭和五十年四月調査）では青年団的は米国の戒めの社会学者の社会関係の分類の手法に従って Personal の関係と impersonal の関係の二類に

9ページ、行内のページ、以下同様

大きく分けてある。（拙著都市社會學原理一〇五頁）

来訪目的は具体的には十九種に細分されてあるが、之を次の四大始めの五種類（1）公用（2）社用（3）商用（4）自由業用務（5）その他）が impersonal の目的で他の第六以下十四種類（6）通勤（7）通学（8）買い物（9）映画その他の娯楽（10）病院その他保健（11）神佛詣（12）親戚訪問（13）友人訪問（14）知人訪問（15）病人見舞（16）法要墓参婚葬（17）海水浴登山慰安（18）漂然と遊び（19）帰省）が personal の関係となっている前者が三〇％後者が七〇％である事が明らかに

されているかぐ先に示した私の四分類の方法を用ふいれば この表は次の様に整理されるく

最初の五種類の目的は私の分類における第三の形式(機関が人に対する関係)又は第四の形式(機関が機関に対する関係)に属するものであるく私の分類の意圖によくて調査されてい

たなどは第四と第四の別も明瞭に区別する事が
出来た。又第六より第十一までの各項(6)通勤(7)通
学(8)買い物(9)映画その他の娯楽(10)病院その他保健
(11)神仏詣は私の四分類法における第二の人が
機関に対する関係である。(12)私戚訪問(13)友人
訪問(14)知人訪問(15)病人見舞(16)法要□墓参□婚葬(19)冠者
の各項は私の分類における第一の人が人に対す
る関係に属するものである。(17)海水浴□登山□旅
行(18)漂然と出かけるのこの二項は社会関係には
縁のないものであるかも知れぬ。もしあればそれは当然第
縁がある。

二の（人が機関に対する関係）に属するものと思われる。

□ 右の整理から次の様な結果が出る。

□ 第一形式（人が人に対する関係）に属するもの

□ 第二形式（人が機関に対する関係）に属するもの

□ 第三形式（機関が人に対する関係）に属するもの

□ 第四形式（機関が機関に対する関係）に属するもの

（黒の線は personal と impersonal の別は私用と公用の別を意味するものであり、従業員の共有かどうか）

→ ツメル

丈は社用

常識的

弘前市に来訪した人のうち弘前市より上級都市であると思われる東京都と青森市からの来訪者はおそらく私の四月法による負担の第四の形式機関が機関に対する関係として来訪した人と負担の形式第二の人が人に対する関係によって来訪した人達である事は鮮やかに明示されている。即ち東京から弘前に来た人は

上や級官吏から下の級官吏又は公用で
用で来たか弘前に居る新成の吉凶事などにかけつ
けて来た人であるかを教えて知らせるとけれとも
これ第5の上級都市から弘前にある機関に仮人
的な領収証の代わりに来た人すなわち人が機関に対
すり固有の分乳法における第二形式の
ものは一人も有りない事が分る。Personal impersonal の二分法ではそれは明らかに得られない。
又弘前より下級都市の不、石や五所川原から
はく弘前市内の機関を利用する人の事件と弘前

それらの下級都市にあり下級機関より弘前にまた上級機関に対する関係で来た人々がそれらの下級都市にある商店から弘前にあり都市の商店に所用あって来た人のあり事が明らかである。

◎この事も関係二分法では現れて来ない。

こうして弘前の都市より弘前に来た人々の数や職業や出身地や社会学的調査をとりあげたのは直接には都市社会学的調査に過ぎないが都市は社会的文化的交流の結節点であり事でありそしてそれは結果においてその活動が社会的文化的交流の結節点となっている

No.

な機関が都市には集まらないからであると
云ふ。部分的機関をはなれては都市の部分的
機能もありえないし、都市全体のものの存在もそれ
の機関の集合体とあり方以外にはないとの
私の理論をあの調査によって証明しようと
思ったからである。

私の考理論すると云ふことは都市は結即的
機関の集合したものであり都市をして
都市たらしめているものは全体に対する部分的機
関であるから都市の大小は部分的機関の量

地價の高低や社會的流動性の多少等

人口稠密度の大小とか

の多少であつて、人口量の大小とか交通量の大小とかは結節的機関の多少に伴う階層的秩序に過ぎない。都市間の支配関係は機関の間の支配関係に過ぎない。

都市性

都市度とは、もの也都市化する結節的機関の分化度と統合度によつて測定さるべきものである。その中枢はいろんな譯で機関の研究は都市の研究の中枢部門をなすものである。しかし機関の研究は都市の研究の中枢部門ではあるが、決して全体ではない。都市は機関が集まつて出来たところには相違ないが、人が住んでいるところである。

又事実である。機関を増して行くにつれて、都市性が増大して行く。今日の都市は別しく都市性を増している。それだけ機関が激増しているのである。けれども、どんなに別しく機関が増加しても人の住居が完全に無視された都市は甞てないし今からもあり得ない。都市のこの二元的性格即ち機関の集合地としての性格と人の密度聚落としての性格とを併せ備えているところに都市の本来的な複雑さはある。

都市のこの二原的構成は、都市住民の一人一人の生活のかれもその通りに現われている。ようである。

それは人が人として生活している活場面と人が機関として活動している場面との二つの質的に異なる生活の型である。人が人として関係する人間関係と人が機関として関係する人間関係との全く異なった二つの社会関係の型である。

元

ツメル

No.

弘前の調査には第三形式（機関が人に対する関係）と第四形式（機関が機関に対する関係）の別が考慮されていないが、たゞ調査された数は全の合計を表わしているものであるけれども、私のこの四分の形式の法によって調査すれば第二形式と第三形式が接近され得るものである。第一形式（人が人に対する形式）と第二（機関が機関に対する形式）との二分の形式だけであるならば同類の分類形式は他にも存在している。

社会学には従来

グループ。

別は勿論、

グループ。

グループ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

分される二つの限界は明白に別かめられる。

内容を異った角度からながめた集團類型

存在和

しかし、両者の混合か相互かくそんなものの

存在形態を重視せしむる。

現に存在している

相容れざる性格の存在が主として云い放たれていると

の様だけ

であると

私は第二形式及び第三形式は右の中間的性

根據には具体性乏しく故に実證的研究の用具となり難い

接又は中間的形態を検出せしめる手懸りをつくっている様に思うのである。

第二形式も第三形式も共に機関と人との間の関係には相異ないがそのその関係の端緒を作るのは何れの側であるかそのその関係に対して何れの側が積極的であるかによってこの関係は二つの形式に別れている。農村の人が都市におもむくのは何を目あてに何を求めて行くか。都市の人が農村におもむくのは何を目あてに何を求めて行くのであるか。面白は用事の

内容も心の構成も全く異なっている。

都市生活における人間関係は人が人に対するものかく人が機関に対するものかによって大きく異なっていると共に人が機関の変からの関係かく機関の変化を伴なわれての関係かによって大きく異なる性格のものである。

故に都市社会学の研究の一般的の分析の用具としての四分類法は一般的役立ちうるのでないかと思われるのである。

又第二次的集団の中に発生する第一次的集

No.

ゲゼルシャフトの中に発生するゲマインシャフト

オーマル集団の中でのインフォーマル集団の発生等に関する実習的に

その解明も私は機関の考察によってその手掛かりを得ようとしている

ソメル

9ポ10字下げ

（二）都市における人間生活

都市で生活して居る者は毎日多くの人に接して居るが名前も素性も知らない人が多い。駅の出札係に義理を出して行く先の駅名を告げれば彼は無言でキップにおつりまで添えて渡す。改札係にキップを示せば彼は無言で改札してくれる。日的の駅に着き出口の改札係に無言のうちにキップを渡し外に出る。デパートに入れば入口の案内係は歓迎の礼

を示し賣り場の係りは必要以上でもなく以下でもない應答をして買い物をする。郵便局の窓口の係りの人も区役所の窓口の人も皆同じ様に必要なだけ應答をする。皆機械の様に正確に必要な應答をしてくれるが、それは常に必要以上でもなく以下でもない。一台の正確な計算機の様である。事実そのプロの販賣が自働式になると、いる機械もあると十円硬貨一枚を入れれば十円区間のキップや体重表示札やキップ、ラメルがでてくる機械があるけれども、しかし係や販賣係

や郵便局の窓口の係りは大部分人間が行くて居いよく明らかに彼等は人間であくて機械ではないく。

私等はそれ等の色々の係りの人たちについては彼等の名前も素性も知らずないかく彼等の係りが何であるかく又その係りではどんな事柄がなされるかについては一通りは知くて居いつまり私等が彼等に期待するものあらじもあきまくて居いよく。それ等の係りの人も私等が何故に彼等の前に現われたか何を彼等に要求して居い

⑥

機械がなくてもいい。仕事が全く変わっていない。様に既に変わっている。

仕事の一部について私達は依頼者となり、彼等は受注者となる。だけである。彼等は機械の向う側に立ち私達は機械のこちら側に立つだけである。機械の仕事はちゃんと変わっているのである。

の全過程

の工程

かをよく知くいのいる。改私俗は私等が一人の
社宮として改私をおめいるのであくいそれは
上の事をおめたりそれ以下の事をおめるので
先は、すをよく知く、るいる。私等が物等を機械
の物は感れると同じ次ぎくに例えば脱穀機の中の穀粉の一つぶ
よくと処理されるが、私等は機械に
けれども私等と物等は明らかに人間同志で
ある。

(ロ)次ページ裏より

私等は御手の先はいはれの事を心のやりと
りをする場合が日にすくはない。少くはない

どこかの都市生活において私等が家の外で接
する人々は皆何かの仕事の人であり、それ
ぞれ無機械的の仕事に
駆られている。機械的である。
彼らの全部について大きな
仕事の仕方の中に何とかの一つの
事業に従事の仕方の中に、都市を含む
国民生活に於ける様々の仕事がある。仕事の生産力
がある。

私の考える

結局
この事は彼等が皆機関の一部である人であ
ると云う事である。

けれども都市の生活で私等が接する人間は
明らかに機械の向う側にいる人間ばかりで
はなく都市生活にも恋愛もあり刎頸の交り
もある事はたしかである。肉私の関係、師弟の
関係には様々の感情が様々の形で動いている
都市生活の中にも～男女の関係は存していない
いのでは決してない。愛憎
等しく人間の間の心のやりとりでありながら
例えばデパートの賣り子と客との関係と
その同一の賣り子とその恋人や肉私との間の

No.

関係は全く別の世界での出来事である。この二つの別々の世界はどうして現われ得るのであろうか。多くの社会学者がそれについて様々の見解を示しているが、それに対して私はそれは主として私の所謂いわゆる機関の変化についた場合と機関の変化とはなれた場合の別にもとづくものであると見ているのである。前者は都市を都市たらしむる機関に関係し、後者は都市の聚落としての性質に関係をもつものと考えるのである。現実の都市生活はこの二つの

複

極端に異なる型の世界とその中間の様々の型の世界が複雑混乱した生活を示している。都市生活のあるところでは甲の型の生活があり又あるところでは乙の生活の型があるし一人の個人の生活についても結局、或あるときは甲の型又あるときは乙の型の生活をしているし甲の型はあくまで甲の型乙の型はあくまで乙の型であるし又それが矛盾なしに同じ時に同じ所で並存している。そこに問題がある。

私のこの見解は猶多の社会哲学者等の社会

No.

的性格ニ分類説ニ比シ具体性ト実證性ニヨク
て織り込んだ様に思ふ。何よりも両者の
中間的存在の理解に役立つ様に思ふのである。

ツメル

9字10字下り

(三) 機関と人

3行

私の理解するところに依れば都市とは市たらしめているものは、そこに集まる人々の結節的機関であり、聚落社会に結節的機関があれば、それだけ都市性が備わって行く。結節的機関とは国民社会内の社会的文化的交流の節目になる様な機能を果たしている社会的機関である。それはありの儘の形では生業活動に外ならぬ。人が生業として運営している活動が結果において国民生活における物や心の社会

的有一化の現象にくおけ結節の様な機能を演じて
る社會的機関となくているものを結節的機関
というのである。この意味での機関は生業又
は生業協力体として運営されているものであ
る。社會的交流の結節に多くなるならば機関活
動の結果において認められる事であると機関
活動の直接の目標がそこにあるのではない。
結節的機関が社會的交流の集合点又は分散点
をなしているのはその機関の活動の結果であ
って目的ではない。商店は商品を販賣する事を

生業としているのであるが、その生業活動の結果は日民社会の中に分業の有一化をもたらす結節的機関となっている。

機関は仕人が生業として経営しているものもあるが、近代都市においては結節的機関となっている。機関は数多の人数千人が協力して経営する生業協力体をなしている場合が多い。大規模の生業協力体を形成している機関においては様々の部局が構成されている。その部局の業務が行われている。けれどもその機関内の様々の活動

に附着した文化

の究極的な統一的目標は明白である。それはその機関が一体となって作り出す何かの社会的価値の生産である。デパートも工場も官廳もパルナンコ屋も皆それぞれ独自の社会的価値を生産している。今私等が手近かに身辺で聚集し得る事実では機関で作り出される価値は国民社会の廣場において評価され交易されるその種々の交易の操作を經て機関の度にあるものは皆それぞれ生計を得る事ができる。

機関が生業又は生業場と体といわれ得る譯で

⑥

と云うよりも、生計を得るために人は機関の度につく。

あるべ

けれども機関が皆それ〳〵何かの社會的價値の生産單位に名づけられうる事は何れの國民社會にも通じて云はる事であるが〳〵機関がその生産した價値を機関の名において直接交易の市場に出し〳〵從業員の生計がそこから得られるとは一概には云えない〳〵經濟文化の相異によりて交易の意味も生業の意味も機関の機能の一半も根本的に異なっている事である〳〵

社會的價値生産單位としての機関の次の如

No.

き特性は見逃さる所べきではない

ツメル

機関の規模が大であれば、それだけそのメカニズムが円滑に回転して行くために、より多く自働的に回転して行く事が必要であり、その内のどの一部分にもそのメカニズムを混乱せしむる様な活動があっては排除されねばならぬ。故に大きな機関ではその部分のどんな末端の係りの仕事も厳格に規定されそれをその通りに運営する事が指示されてゐない。機関の働いあるものは機関の指示に従って行動し外は禁ぜられ指示された事だけが期待される。機関の

規模が大であれば大なるその構造もメカニズムもより精密な組織をもつていなければならない。その内の各部局において機関の度について言はゞその大きさは機関そのものの一部分となりそのメカニズムの一部分として活動するものである。彼の活動は機関そのものの活動である。人間の活動とは云へ難い。機関はその活動が一定の規準によつて進められる事が公務されているものであり機関に配置されている従業者は機関の運転を正調な

らしむる丈の意味で配置されている機械に過ぎない。機械の機械である。

機関の定んである人は機関の機械であって、機関そのものの動きは一定の方法と一定の順序で自働的に進行していくものであるとする事ができる。動きをしん機関はその構造によって一定のメカニズムを進んで行く。

機関の定にある人の活動は事務だと云う事ができる。事務とは規則に従って操作が進められて行く事を意味する。従が行くと同じ

の一部分

様な進行を辿るものである。未計算、未だ、
未だ感情が入る事に伯牧が入る事を特性とし
ているので、彼がなす事は彼でなくても出来る事
である。皆代行の出来る仕事である。
単純に
機関の側にある人を人と思ってはならぬ。
彼は機関の運転の機械だと云へばさうである。機
関は動き出せば一定の順序で一定の形式で運転
をつづける。機関は動いているか動いていない
かの別があるだけであって動き出せば常に動き方は
一定である。それが公的な機関である。
されている

No.

機関の産業における人の作業は特に今日の都市における大規模の機関においては各部分における作業は大きな流れ作業の中の一節として早く操作しなければ次の仕事が直ぐその後から追っかけて来る。人は深く思慮する余裕もなく人は機械以上に精巧な機械として機械を操作している丈である。

の一部分をなす機械でしかない。

ツメル

都市の内にある様々の機関は皆その活動を進めているのは間違いなくその従業員達であるけれども従業員が人と云いうるかどうかは問題である。事実従業員は新しい機械によって次々に代替されつつある。人間より安価な機械が発明され次々その新しい機械は人間を駆逐して代行者となるけれども機械が人に代行し得る一限界は明白である。機械は笑ふ事も泣く事もできないけれども機械には必要のないことである。

笑ふことも泣く事も

機関が交易の媒介をなしていはば國民社會

9行ほど下げ

（四）交易の條件

特に結節的

都市に集まっている機関は特に交易性の高い結節的機関である。故に機関が交易の媒介をなしていはば國民社會

結節性は交易性

追及の結果として生ずるものである。

当然に

是は

半は半分の関係にある。故に交易性こそ今は

基本的に

の我々の都市の機関の性格を規定している。

そして

ものである。

単に都市の機関の性格が都市生活そのものの

我々の

基調をなしていると考えられる。

ソメル

凡そ交易は次の如き関係を條件としていると認める事が出来る。

一、交易は対等のAとBとの間に行われる。換言

一、Aも暴力乃至威嚇もこの対等の関係を乱す事は許されないと思われている。

一、交易においてはAもBも共に自由に行動しているものである事を相互に認めなければならぬ。

一、交易はその時その場における厳密なる評價によって決定される。時と場の位置について

厳正でなければならぬ。

一、交易の関係はAも希望しBも希望しなければならぬ。

Aは自分が提供するものがBの提供するものより利用價が高いと認めBは自分よりAが利用價が高いと認める時に交易は成立する。故に主觀的には何れの側も交易によりて己れを利していると信ずべきものである。

ツメル

交易はAの欲するものとBの欲するものに差異があるから成立する。AとBの欲求するものの差異の上にのみ成立する。交易は当然に此の物質の間に成立する。愛好するものの相違、所有するものの相違、欠乏するものの相違、富の量の相違などの間に成立する。

交易は相互利用であるが、また対手Bの提供しうる望ましいものをAが自分の生活に利用せんとする志望となる。この関係の発動がこの関係の端緒となる。同始者と端緒者とは必ずしも同一でなくAであるBであるの事に注意

すべきである。

交易は結局Aが B を利用する事を終結する社会過程である。かくAは受けるために与えるのである。かく与えるために受けるのでは決してない。Bも与えるために受けるのでは決してなく受けるために与えるのである。それが交易である。

より中庸としてより中実に

問題は受ける事を痛切に感じていたそこに問題がある。

恐らくそのものを形成していたのである。

相手がもとめる

もて

Bは交易の性質を感じないであろうし、何か不足するものがあれば、それを高いと交易

を必要とする。であろう。貧しい者程交易の必要を感ずる。然し交易の必要をさし迫って感ずる時程常に又さし迫って感ずる。その交易には不利の立場にある事を私等はよく知っているが、それを論記する事がどんなにその人に不利であるかは今ここにはない。

交易の発端は相手の提供し得る事物が自分に感じていると云うことである。彼は対手より常に不利の立場にあると云う事が一般に云い得るのである。

原則的に貧しい者程交易を急ぎ、ものを得たいと思い、更に痛切に使用価値を欲する為、不利の立場にあると云う事が一般

機会が多い。

そうであるならば当然に

それ程多く

考えて見れば、それを論述する事は簡単な事ではない。私の主観的な感じ方がそう思わしいに過ぎないのかも知れないけれども、実際の傾向がほんの少しでも存しているとしたらそれは大変な事である。

に云い得るのである。

もしそうであるならば、交易は対等の関係に
あるのではない。交易は持てる者の全く
静かな家庭をそこなわれないで、
それによって富者は富み、貧者は貧しくなるとも云えないわけはない。
これをすべなしとせば、貧者は
いよいよ貧しくなるばかりである。

そんな特性があるために

交易の関係は、いろいろの無理な又悲惨な矛盾をも
発生せしめ得るのである。不利な立場に
ある人々の悲惨は交易無制限に
合法的に生じ得る。
服の限界に達しても乱暴な騒ぎを起し得る。

◎又交易における自由は、不利に向い得る自由である。
一方の側では、

古い時代から

あるから交易の制度はその制度を統治する機構威力なる保護が必要であった。今日では家が法律と武力によるその必要を感じている。交易は合法的で最も合理的な人間協力の制度であると国民は皆信じさせられている。

交易の條件の合理性を国民は疑わないが、貧困になれば加速度的に貧困が増すことを誰も感知していると思う。国民が生産の変や交易に対して過敏となり硬直した態度をとるのはこのためである。それが又都市の人の生活態度にもなっているのであろう。

都市の庶民は貧乏になるまいと皆おのおのしている。

けれども交易には右の様な性格も考えられ得るとしても、我々の都市はこれなくしては存続し得ないものであり、年の激を越し難い負担に堪えられず、貧しい者が明らかに不利な立場を余儀なくされ、その為に不幸が生じた様な場合でもその不幸は当人の怠惰の報いと解され、誰も交易の制度に疑いをもつ者はない。交易は合法的で合理的であると認める事には法律の秩序において、私等の意識の世界において、疑の余地

No.

はないく私だから の都市生活が交易の上に安定し
ている事は明白であるく

ノメル

9ポ 10まで

3行とり

五

機関の度における人と機関の度とは

かれている時の人

機関の度にあるとこういうことは、機関に所属しているということはありである。機関の度にあるとこういうことは機関のメカニズムに沿って行なうものであり、機関そのものの一部として行なっている事である。ある機関に所属しながら、その機関の度についていない事もある。

A 自分の友人が他の所属する機関の中に、他の職場を世話した事がある。

B 他はその機関の度

から世話したのではなくて友人として世話したのであるから話しがうまくゆかなかったのである

はその機関にあった彼自身の職場を失ったので彼は非常に悲嘆した事がある。機関の変から世話する事と友人として世話する事とは両立し得なかったのである。

機関の変にあるほの人の心は機関のメカニズムに沿っている心であり、それ以外の心は許されないのが原則である。機関のメカニズムとは財産の社会的価値を重視してそれを

民社会の市場において　おのおのできるだけ有利に交易する事であるが交易の原則が機関のメカニズムを貫いていると機関の度においては人はそれ以外の活動は禁じられて居いるが人を援助するとも云う事は機関のメカニズムのどこにもあり得ない。機関は生業であるから交易の原則の上に立つものであるが交易は人と人との相互利用の過程であるが、しかし機関に人を利用しようとはするが利用されようとはしない。利用するために利用されるのであって利用されるために利用す

No.

ものは決してない。

失業した者が友人に就職を依頼するのは友人を利用する事ではないのか。援助を求める心は交易における相互利用の心とは異っている。交易における利用は常に反対給付を考えていると云ふものであるが、友人に援助を求める心は反対給付を考えない一方的給付だけを強要している。

恐らくと云ふもの

反対給付を予期しないで与えるのは愛である。これに報ゆる心は道義のこころである。

恐らくと云ふもので

恐らく

恐らくそこに恩に報いんとする心あり。

否。

単なる問題である。

あるく愛と道義は明らかに人の心と人の心と
直接のやりとりであるく援助をたのむのも人の心で
ありくそれに應ずるのも人の心であるく
相互利用の原則の上にある機関の心は人の
心に耳を傾ける心ではないく援助は人の心に
耳を傾ける人の心がなし得る事であるく友人に
就職を依頼するのも人の心くそれに應じて力となる
ようとするのも人の心であるく人を利用する事
のみ考える機関の心には人の心は聞えなへく給
はと反対給はのやり取りの内に利を集めるのが

基本的態度

機関の制限があるから、あるべき常に反対給付を考えている機関には一定的な給付である援助は考えられない事である。得ない

人生の生業の変にあるばかりあるとともに生業の生活には常に相互利用の関係の上にあるべき利の変かゝはなれている時もあるべけれども機関の変は常に生業の変であるべき

私等の生業の変は常に相互利用の関係の上にあるべき利益を定位している。

と打算はその作為基準とあるべき

人生の半分は生業の変で暮されるが、他の半分は生業の変よりあはなれている。機関の者は

常に先生の教が、あの。

凡そ機関の変についていないときの人の心の活動は豊かな感情に左右されていよ点において機関の変にあり人の心と明白に異なっていると好悪愛憎の感情は機関の変についていない時の人の心はその人なりにいつもつきまとっていると知るにかくの如き感情は機関の変にある人の心には厳然存されている。機関の変についていない時の人の心がく人の本来のありのままの心の活動であるか。機関の変についている時の人の心はその機

るかどうかは明らかではないとしても

No.

関のメカニズムに沿って動いている心の活動であるとする人の心の強制された特殊の場合であると云

のみ

~~事が~~ 事だけ

~~実は~~ はたしかである

マメル

No.

本年度の芸術祭テレビ劇部門における入社試験に関するものであるが、作者傷痕は一つの大きなかくし芸は結局その会社のメカニズムに最も適合する人がえらばれたであり、選考推薦を決定するその会社の幹部の人選ばれた人としての善意がいるかいあくんをたくみに描きだしている。

ツメル

↑9行〜10字下げ
↓3行とり

（六）都市的社會と村落的社會とその中間的社會

今日の都市における社會生活を強力に支配規制しているものは主としてそこにある大きな機関の活動である。それ等の機関は皆それぞれの目的のために活動している組織体であるかくさなから自働的に動いている精巧な機械である。それを構成しているのは明らかに人間であるが、一人一人の個人の力では動かせない。

大きな組織である事が多い。

都市の住民は直接にか間接にか皆それ等の様

関の或あるものは所属し生業としてその運営の為に働いているが、機関の変化についている時のそれ等の人々の生活は、機関そのものの活動以上ではない。機関は人を材として用いている大きな機械であるからである。

又都市で生活するものは、機関の活動を利用することなしには一日も生活を続けてゆくことできず事は出来ない。食品もサービスも水さへも、ことごとく機関を利用して都市では人は機関に依存している。

かくて今日の都市生活は様々の機関の活動

に調子をあわせて皆が営まれていると云う事が
出来る

今日の都市にもく友人関係もありく恋愛の
関係や家族や親族の関係などもないではない
けれどもく仮りにそれらの個人的な関係が少
しも存しないでもく人は都市では様々の機関
に依存し利用するだけでえらに秩序ある生活をつづけ
て行く事が出来る。一人の友人もなくく一人
の家族も親族もいないでもく人は都市では様
々の機関に依存し利用するだけで何の不自由もなく生

きて行く事が出来る。職場とべつドさえあれば結構楽しく生きてゆける。

これに対して村落ではく生業もあり機関もあり交易もない譯ではないのであるが、生業は自給自足性多く、機関の組織は家族と等しく交易も少く結節性はほとんどない。村落では機関はほとんどなきに等しく、人と人との間の愛情や道義による協力のみが社会の秩序を守っている。村落は人の協力的組織以上ではない。

村落では村々の人達の愛情の世界より孤立

すよ事は~~耐湯を者い程の苦しみであった。~~耐え難い事である。かつて村落での刑は村八ヲブであった。村八ヲブは村の人達が皆その人と交際しないという事だけ~~それ丈~~である。村八ヲブは昭和に入ってもまだ残っていたところがある。

かくて都市における社会生活を~~動かし~~支配している~~物~~ものは主として人と人との間に存~~しい~~する。

~~媒体としての機関であり、機関における合理性である。~~

~~村落における社会生活を動かしている物は~~支配しているものは主として村の人達の直接の心のやり

No.

とりてありくそれを貫ぬいている情義である

といえる。

ツメル

よ

改行

都市化の過程

都市化の過程そは都市度の昇の過程としてはく(1)聚落社会に結節的機関が増加して行く事く(2)結節的機関の増加に伴くて面識なき人との社会関係が増加して行く事く(3)面識なき人との社会関係の増加に伴い社会関係が合理性を増して行く事が考えられる。

この都市化

などの過程は村落社会のない(民)社会には当然にない

本来結節的機関そのものが自給自足性を欠くものであるから結節的機関の増加はそれだけ自足自給性の減少と交易活動の増大を伴い

のであるが又一方結節的機関の増加は非面識者との社会関係の増加を来たすが故に交通動の増大と非面識者との社会関係の増加は平行して進むこの平行する進行の内に合理化は当然に進むものと思はれるが機関の発生と増加が都市化の現象における中核である事が理解される

具体的に云へば純村落の上に結節的機関が加はわりて都市的となり結節的機関が増大して都市性が増して行いき都市度

の最も高い大都市に達するまで結節的機関の増加は見られ都市化は進むものであるが、一方の極が大都市であり、一方の極が純粋農村である。その中間に様々の段階の都市的存在がある。純粋農村より大都市に至る様々の段階を区分する指標のものは、何よりもまづ見られる結節的機関の量である。そしてそれらの各段階を通じて認められるものは聚落社会としての性格であるけれども聚落社会としての機能と都市化の上昇と共に変質していく。共

同防衛の機能が都市化と共に合理化を進めている事情は比較的容易であるが、生活協力の機能も都市化と共に合理化を進める事情を確認する事は容易であるが、これはまた問題が残っている。

村落における生活協力が愛情と道義をもととするものであるのに対して、都市における生活協力が打算と合理を基とする交易の過程によるものであると見る見解、別言すれば、村落的な日々の生活の秩序は道義と愛

情の静かな協力の上に、そして都市の生活の秩序は打算と合理の冷厳な平衡の上に維持されていると、見る理解には、根本的な考え方には誤りはないと思われる。

これらの二つの結合的中間結合の社会である。

が、しかし、その中間的存在はいかにして可能であるか。

◎の中間に存する様々の段階の存在はどんな形で構成され発展しているのであるか、それは水と油の中間的存在に比すべきものではない事だけは明らかである。

私が今こゝで問題とする中間的存在は純粋
性と大都市の中間に存する聚落社會の中に認
められ得る若しく純粋農村の中にも大都市の中にも認
め得る中間的存在である。
大都市の中に見られる情義の関係は如何に
理解さるべきであるか。純粋農村の中に見られ
る合理の関係は如何に理解さるべきであるか。
中間的存在の理解はそれにも答え得なければ
ならぬ。

都市での人の心は主として機関の度にある
人の心々それは計算器の心々合理と打算を本
としている心々都市では機関の関係が多いの
で都市生活に支配的に存する心は計算器の心で
ある。
村落での人の心は機関の度についていない
場合の人の心々而識者同の全人格的な結合に
おける人の心々愛情と道義をもととしている
心である。
けれども都市にも村落的な世界があり

〈村落は〉

〈村落は〉都市的な世界がある。

都市の職場に見られるオンなスモールグループと都市の住宅街に見られる自然近隣は都市に見られる村落的世界である。〈どんなに都市化がほんとうでもあろうと思われる村落的世界である〉

都市の中に生きつづけている小さな村落の蔵である。〈そこには村落における様な結合の関係が半ばは存している〉

〈村落的〉

〈文盲〉

〈村落的〉世界があり得るのであり、今の都市生活にはそんな関係が見られるのは外には外には

〈ほど〉

〈ろは世界宗教である〉

見られ

社会学者の説明

とないから、外にはそんな世界も理解され得ない

であろうと説明

のこと云う者は一度正当の様に見える。

けれどもし社会における都市的な世界の有力

が同一の原理からは説明され得ない

村落は農耕と道徳が秩序を与へて来た世界

であるがくしかしこの人口密度が性的な世界にも厳

なる交通の原理の上に立っている関係が久しい

以前から存して来たく。溝とコイがそれである

日本の溝と朝鮮の契と中国の会合はく全く

同一の構造と機能をもつものである。中国の合衆は唐時代に既に存していたものとみられている。合理的な集財場の慣行として革命前の中国に存していたが、革命後は今も存している。

日本のユイと朝鮮のプマシと中国のパンクンもその適用される場合も方法も殆と同一である。これは労力交換の合理的な法則に基づいている。これは甚だ古くからの慣行の様である。

講はものに関し、コイは勞力に関している。都市で生業として交易されるものも結局は勞力以外にはない。それは明らかに生活の經濟的基礎である。そこで私は次の様な疑問をもって進及していく。

ツメル

然らば、凡そ生業に関する協力は、人と人との間のあらゆる協力の中で特別に合理化されているのではないのか。生業に関係ない人間の協力は情義の支配にまかされているのではないのか。その点が完全に明らかになったならば、都市的社会についても村落的社会の性についても、その中の社会の性についても容易に説明し得る様に思はれるのである。

生活の経済的基礎

即ち生業に関係ある協力

ツメル

村落ではく村落内部において物や労力の交易の機会が少いから情義による協力の場合が多いがく物か労力による協力の関係もが少しまとまらくて生じた場合にはく村落の社会でも直ちに冷徹な合理性が今も指頭していると古くからも指頭していたのではないのかく。

都市生活ではく交易に無関係のところは珍らしいく。そんなところは荒海の中の珍らしい平和なお島であるく。インテリマルなスモールグループも自然近隣生業活動のリズムの上

関係

都会生活の大集団

から離れて造られるから

になるところであるから愛情の小天地がつくられているのである。持続的反覆的結合が見られるからのみでは決してないのであろう。

最後に一言、人の生活には愛情と合理は都市においても村落においても紙一重をへだてて生きている。愛情だけでも生きられないし、合理だけでも生きられぬ事を人は今も昔も知りぬいている。冷厳な合理はせめて生業関係だけにとどめたいというのが人間の古くからの悲願ではないのか。そこに人間の社会関係を大きく二類に分つ直接の根拠もあるのではないのか。

情義

となる

生業関係のものとその他のものに。